4月9日のメッセージ

聖書:ヨハネによる福音書 20:1-18

「わたしは主を見ました」

「イースターおめでとうございます。」

今、私たちはこのイースターの日、イエス復活の朝を喜びをもって穏やかに迎えています。しかし、 聖書が伝える復活の朝は、こんな和やかな雰囲気ではありませんでした。

イエスを失って打ちひしがれる弟子たちのところへ、マグダラのマリアが走り寄ってきて叫びます。「大変です。主が墓から取り去られました」(「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」ヨハネによる福音書 20:2)。弟子たちは上を下への大騒ぎとなりました。慌てて、筆頭弟子を自認するペトロともう一人が墓へと駆け出していきます。そして、報告の通り、イエスがそこにおられないことを確認して、とぼとぼと帰って行きました。意気消沈して。

後に、パウロはコリントの人々への手紙の中で、復活を信じない者がいることを非難していますが、 それも無理のないことかもしれません(「あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはど ういうわけですか。」コリントの信徒への手紙 15:12)。なぜなら、最初の弟子たちも復活されることを信じ ていなかったのですから(「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はま だ理解していなかったのである。」ヨハネによる福音書 20:9)。もちろんそれは、マグダラのマリアも同じです (「マリアは言った。『わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。』」ヨハネ による福音書 20:13)。彼女もまた、自分の物語の中にイエスの物語を落とし込もうとしていました。

この点から、この後、復活されたイエスが最初にマリアの前に現れたのは、彼女が特別だったからではないことがわかります。イエスが姿を現されたのは、信じない者を含めて、全ての者を神が愛し抜かれることの証しでした(「わたしは、とこしえの愛をもってあなたを愛し/変わることなく慈しみを注ぐ。」エレミヤ書31:3)。悲しみに暮れる全ての人を喜びへと導かれる、神の愛の表れでした(「泣きながら夜を過ごす人にも/喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる。」詩編30:6)。

そして、同時にこれは、自分の物語の中に神を押し込めようとする者に対する警告でもありました (「イエスは言われた。『わたしにすがりつくのはよしなさい。』」ヨハネによる福音書 20:17)。人はどうしても自分の見たいものを自分の見たいようにしか見ることができません。 そして、「今さえ良ければ」「自分さえ良ければ」の誘惑になかなか打ち克つことができないのです(「この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です。」 コリントの信徒への手紙 15:19)。

事実、主の変容を目撃したペトロは、自分たちのために仮小屋を建てようとしました(「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。」ルカによる福音書 9:33)。では今、復活を目撃したあなたはどうする、とイエスは問われています。しかも、これは問いでは終わりません。マリアの目を開かれたイエスはマリアの心をも開かれます。新しく自分の十字架を背負って歩く者へと変えられました。今一度、神の言葉に聞いて一歩を踏み出す者へと変えられました。

「わたしは主を見ました。」(ヨハネによる福音書 20:18)

マリアは復活の主に出会い、自分が安心するだけでは終わりません。なおも 混乱する弟子たちのところへと帰って行きます。意気軒昂として。

それは、未だ自分の見たいようにしか世界を見ようとしない彼らに真実を伝えるためです。自らも変えられたように、彼らも「自分さえ良ければ」から変えられることを期待しての一歩でもありました。

今、私たちも改めて復活の主と出会っています。その喜びを一人自分たちのものにしてしまうのではなく、混乱する世界に喜びを伝えたマリアに続く私たちとなっていきたいのです。

